

絵画修復家の アトリエから

加賀優記子……絵画修復家

3 先回に引きつづき、今回もまたルーブル美術館以外での仕事についてお話ししようと思います。

1994年の初夏、私と、私の師匠、そしてもう一人の相棒で、モスクワ美術館から来た修復家のニコラの三人は、パリから南西およそ300キロのリモージュという地方小都市に、この町のリモージュ国立陶磁器博物館(別名アドリアン・デ・ブーシェ)の天井画修復のためにルーブルから派遣されました。リモージュは、デパートのように大きな建物は無く、目抜き通りにいくらか商店や映画館があるだけの、こじんまりとした町でした。その町の中心に、美術館は建っており、私達は修復の機材を満載にしたジープで市街地に立ち並ぶリモージュ陶磁器の小売店や工場を通り過ぎ、ぐ

るっと美術館前のロータリーを一周してこれを見物し、それから首尾よく逗留するホテルを見つけました。そうして、私達は、しごくこの新しい環境に満足していました。何故なら確かに町は小さいけれど、ホテルの部屋は清潔だったし、なにしろ1900年のアー

ル・デコの時代に建てられた美術館は、思いの外立派で大変美しい外観だったからです。私も、無粋な(?)おじさん二人と毎日仕事をする事や、おまけに同一ホテルでの田舎暮らしに

は、正直言つて一抹の不安を感じてはいたのですが、とても素晴らしい建築様式のこの美術館での仕事が早くも楽



リモージュ国立陶磁器博物館の
外観(右)と内部(上)



しみになっていたし、どっちみちひと夏なんて、あつと言つ間に時が過ぎるだろうと考えていたので。 (実際その時はまだ、さまざまなハプニングが私達を待ち受けているなどは、誰も想像しなかつたのでした。)

翌日から早速仕事にかかるために、我々は美術館を訪れました。美術館の内部には、立派な陳列棚が延々と並び、その中には歴代の王家の素晴らしいリモージュ陶器のコレクション、有名な画家の描いた皿等が並び、いくから見ても飽きないものでした。美術館の奥には国立美術学校があり、主に陶器の制作を学ぶことができ、時々その制作風景も見せて頂けたり、楽しい一時を過ごすこともできました。

しかし、修復のほうの仕事はそんなに甘いものではありませんでした!

陳列棚の並ぶ1階のサロンの天井には、いかにもオール・デコ調の装飾が描かれ、素敵な雰囲気なのですが、階段を上がつたサロンは、なぜか真っ白で、その次に続く豪華な天井画の描かれた2階の大広間とはひどくかけはなれた感じがしていました。そして判ったことは、この真っ白な階段とその踊り場、つづくサロンはすべて数代前の館長の指示によって、その装飾画がすべてペンキで塗られてしまつていたのでした。階段の途中には、

金色のプレートがはめこまれており、そこには1900年という文字が書かれていました。つまり、この館長さんは、自分の趣味で、歴史的記念物を白紙にしてしまつたのです。

そこで私達は、このペンキでおおわれた絵画を、下の絵の具層にはダメージを与えないように、少しずつペンキを落として再現してゆくことになりました。この作業だけでも大変時間が掛かるものであったのに、尚且つこの装飾画には心ないペンキ職人達がへらのさきで平坦にするために絵の具を削ってしまった所もあり、そこに補彩も施して

いかなくはなりません。それにまた、この仕事はルーブルの管轄で行つてゐるため、週に一度、ルーブルのラボの方が私達の提出するサンプルや報告書を持ち帰ったり、分析データをたずさえて来たりするので、時にはこちら側の現場とルーブル側との見解が合致せず、作業を何日も中断するという事もありました。

しかし何と言つても参つてしまつたのは、高い所の天井画の修復作業するために、可動式の足場をパリから送らせたのですが、これが何故か手違いのために部品が足らず仕事ができなくなり、じつと待つことになつてしまつたのです。ところがここがフランスのこと、待つこと一カ月以上ともなり、我々のイライラも極度に達してきてしまつてしまつた。



リモージュの町



らやつて来た町の人々の噂にのぼつた頃のこと、農作業をしていたこの家のおかみさんが、家の外の壁にシャベルを置くと、ぽこつと地面がへこんでそこから古いマリヤ石像がでてきたのだそうです。形がかなり古いもので、家も数百年経つて居ることから、見立てを私の師匠に頼みに来たのでした。師匠が見たところ、これはほとんどなく古い、価値のあるもので、市に通報したほうがよい、とアドバ

最初のうちは無為な昼間の時間を美術館で過ごした後、リモージュ名物料理を食べに行つたり、退屈な夜を毎晩三人でカフェで玉突きをしたりしていましたが、何しろ小さい町のこと、かなり血なまぐさい「王妃マルゴ」の映画を三回見たあたりで全員が「もうイヤター」とうんざりしていたある日、いつものように美術館で暇つぶしをしていて私達に一人のおじさんが話しかけて来ました。どうやらこの土地の名士らしく、翌日我々は昼食の招待を受けてこのおじさんの館まででかけました。いかにも大農家らしい長々とつづく羊牧場をぬけると、何百年も建つていそうな石造りの館があり、親戚も集まつての歓待を受けたのですが、それにはひとつ訳があつたのです。我々がパリか

イスしたのでした。そしてこの発見がローカル紙の記事となり、それからは美術館での私達はたくさんのお陰で退屈することなく無事に足場も送られて来て、リモージュでの仕事をやり終える事ができたのでした。ただ、それ以後、ピリヤードの看板を見ると少し血の騒ぐ私にはなつてしまいました。(つづく)



かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。